

Title	表紙 ; Contents
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.13, (2010. 9)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000013--001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Newsletter

2010 September No. 13



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

慶應大学が、そうありうること On Culture and Keio	1
第9回プラトン・シンポジウム 市民公開講座 プラトン哲学の現代的意義 ～『ポリテイア』(国家篇)を中心に～ The 9th Symposium Platonium of the International Plato Society The Significance of Plato's Philosophy in the Contemporary World: Reconsidering the Politeia	2
慶應義塾大学言語教育シンポジウム 英文解釈法再考 ～日本人にふさわしい英語学習法を考える～ Keio University Symposium on Language Teaching: Reevaluating How to Interpret English Constructions, Phrases, and Passages	3
英文論文執筆のための講習会 2010 The Workshop of Writing Research Papers in English for Young Researchers 脳の講習会～基礎知識～ Seminar Series on Brain Science	4
シンポジウム Contingency as a Fundamental Determinant for Human Behavior: Quantitative and Developmental Views from Young Behavior Analysts Dr. Warren H. Meck 講演会 Functional and Neural Mechanisms of Interval Timing	5
GCOE ワークショップ 真理の度合理論は適切か? ～ファジィ論理と真理理論～ Lecture by Dr. Shunsuke Yatabe: Relationship between Fuzzy Logic and Truth Theory Akihiro Kanamori 教授・ Juliet Floyd 教授講演会 Lectures by Professor Akihiro Kanamori and Professor Juliet Floyd 研究セミナー トランスナショナルな移民の生活感情: 文化人類学的アプローチ Emotional Terrain of Transnational Immigrants: a Cultural Anthropological Approach	6
活動報告	7
研究員紹介・事務局だより	8

慶應大学が、そうありうること On Culture and Keio

船曳建夫

東京大学大学院総合文化研究科・文化人類学教授

Takeo Funabiki

Professor, Department of Cultural Anthropology, University of Tokyo



狭い意味での人間の文化、芸術や学問は、時として、数百年のスパ
ンで、衰退することがある。

『源氏物語』を生んだ後、日本の物語文学はどうなったか。鎌倉、
室町の物語群を見ると、質、量、共に劣化したことが分かる。その回
復は、滝沢馬琴や明治の小説まで待つしかなかった。ギリシャの哲学
は、そこを頂点として、あとは下るだけであった。中国の諸子百家も、
その議論の高みは、次の時代に続くことはなかった。人間の文化は、
その水準が下がることがあるのだ。

ただ、さらに見てみると別の事態が起きているのも分かる。数百年
かせいぜい数千人の読者しか持たなかったであろう平安文学は、室町
になると、万を優に超える読者を獲得することとなった。ギリシャの

哲学も諸子百家の議論も、その後の祖述者や注釈者によって、広い地域の多くの人々によって引用
され、生活の中にも活用されることとなった。言い換えれば、「普及」したのである。

私は、現在の日本を含めた経済的先進国において、芸術や学問は活発に普及しつつあるが、その
水準は、多くのジャンルにおいて、今後、低下するのではないかと予測している。その予測は、芸
術と学問の精華というものは、大き過ぎず小さ過ぎない、限られた競争者たちの、競争に集中する
ことの出来る安定した環境から生み出されるとの考えから来ている。過去において文化の競争者た
ちは、平安の貴族、アテナイの「市民」、中国古代の政治顧問団であり、彼らは、身分制の上に立ち、
競い合い、切磋琢磨するエリートとして、芸術や学問を生み出したのである。近代では、前時代の
貴族の特権の継承者、富裕層、大学の教育・研究者がそれである。彼らが、文章や議論の水準を高
く保つことが出来たのは、限られた数のサークル内の競争であるため批判の基準を共有しやすく、
互いの評価が強く働くからだ。

現在、近代がもたらした恩恵は、そうした文化生産により多くの者を参入させることが出来るよ
うになった。ここでも、参入者を、批判と評価によって適切に制限すれば、理論的には、より多くの優れた参
加者によって文化の水準は保たれ、または上昇する。しかし、そうした制限は適切には機能しない。多
くの者による参加の要請を、少数の者が抑えることは出来ないからだ。限られた競争者たちの方が自分
で水準を下げることはない。彼らの活動と、社会制度の変化、伝達技術の進歩が「普及」をもたら
し、それが結果的に、水準の低下をもたらす。つまり、文化は洗練と普及の波動を繰り返すのだ。

さて、こうしたことは学問においても然りであろう。社会が、学問の応用と普及を強く要請する傾向は、
強まっている。自然科学はさておき、私は、人文・社会科学では、哲学から歴史学、経済学に至るまで、
近代の興隆は、もはやある頂点を過ぎた、と考えている。ノーベル文学賞も経済学賞も、年々受賞者
は小粒になっている。時代は、いま多くの解釈者や祖述者によって、複製技術と伝達技術を力とし、
学問がその頂点を低めながらも「普及」を拡大している過程に入ったと考えられる。

こうした中、私は、大学は、「普及」の仕事をするべきではない、またはすべての大学がその仕事
にかかわらずってはいけない、と考える。もちろん、大学がある時点での政治・社会体制の要請を
拒否することは難しい。とりわけ、日本の国立大学のように、国民エリートの養成機関として始ま
ったところの、青い痣を尻に隠し持つところは。

そのとき、慶應義塾大学が、現在の国家体制が始まる以前に開学(安政5〔1858〕年)された唯
一の大学であることは、大いなる意味を持つであろう。現国家体制から距離を取る理念を持ちうる
大学だけが、今後の学問の頂点の低まりと裾野の拡大の潮流の中で、現在の学問の水準を、たとえ
ば数百年後、潮目の変わるときまで、どのような社会体制であろうと、生き延びて、持ち堪える可
能性がある。それは、アリストテレスの哲学が中世神学とその後のルネッサンスまで、地域を変え、
担い手を換え伝えられように、人類的立場からの知の企図となる。慶應義塾大学は、そのような任
に当たるにふさわしい大学だし、そうありうる、と考えるのである。

(see page 5 for English summary)